

1905年に愛知淑徳女学校が誕生してから70年目の1975(昭和50)年、学園は10年の準備期間をかけた念願の4年制大学を開学します。当初は文学部の国文科と英文科の1学部2学科のみの女子大学でした。卒業生に学園の思い出を語っていただくシリーズの第15回は、大学の第1回卒業生で、バレエ公演などの舞台監督として活躍中の冬頭裕子さんの登場です。

## 山の中にぽつんと校舎があるだけ。初めは大学と思えず、不安でした。

愛知淑徳高校の3年生だった時、愛知淑徳大学が認可されました。大学は理系志望で外部受験するつもりでしたが、先生から「万一のために淑徳大学を受けておきなさい」と言われ、星ヶ丘の短期大学の校舎で受験。結局、滑り止めで受けたこちらに入ることになりました。長久手キャンパスは山の中で、校舎がぽつんと二つあるだけ。初めて行った時は「本当にここ？」と不安でした。入学当初は、星ヶ丘からバスで牧の原というバス停まで行き、10分ほど歩いたところにあるバス乗り場からスクールバスで大学まで通っていました。バスの本数が少ないから、遅刻も早退もできません。今だから言いますが、禁止だった自動車通学をしていました。親から

「駐車場を借りなさい」と言われましたが、山の中に隠しておいたので大丈夫。第一、駐車場なんてありませんでした(笑)。周囲の道路が舗装されていなかったこともあり、雪が降ると車通学の子は坂が上れなくて帰宅していましたね。2年ぐらいいしてから、本郷から大学までバスが直通で通るようになりました。学生数は国文、英文を合わせて約200人、4クラスありましたが、ほとんどが淑徳高校の卒業生でした。1期生で先輩がいなかったせいもあり、高校の延長のようで、大学1年が高校4年という感じでした。担任は都築久義先生(現在、副学長で)

自分のおじいちゃんくらいの年齢の先生ばかりの中で一番若い先生で、話しやすかったですね。校舎は3階建てで、高校のような教室が九つと、入学式や卒業式を行った大講堂と呼ばれていた教室、図書室、それに地下に食堂がありました。私のいた頃にはゼミがなく、というのも小さな教室がなかったからだと思います。卒論は、私は「源氏物語」を選んだので、その時代が専門の近藤一(かずいち)先生に指導していただきました。英文より勉強しなくていいんじゃないかと国文を選びましたが、授業は厳しかったですね。出欠も厳しく取られましたし、4年次には卒業試験もありました。思い出に残っている授業は当時、学長だった小林素三郎先生の演劇や歌舞伎の授業です。1期生だったので、部活、サークルは早い者勝ちで作ることができませんでした。私は弓道部に籍だけ置いて、演劇部にも関わっていました。4年

生の時、演劇好きだった素三郎先生の肩入れで名古屋市民会館(現在、東京大学文化市民会館の中ホール)を借り、淑徳大学主催で名古屋の大学の演劇部の合同発表会のようなものを開いたこともありました。私たちの学生時代は、女子大生は卒業しても就職先がない頃で、家事手伝い、結婚というパターンが普通でした。大学をやめて結婚した同級生も何人かいます。先生になった友達はいましたが、私の周囲で就職した人は一人もいませんでした。私は卒業後、親の会社の手伝いをしていましたが、趣味で続けた演劇のサークルで知り合ったプロの方に声をかけていただき、オペラの演出助手の仕事をする。その後、バレエの舞台監督を始め、多い時には年間30本以上の公演に関わってきました。舞台監督は公演当日の責任者、舞台全体の進行役です。舞台は、生なのでやり直しがきかない、それだけにやりがいがありますね。淑徳の4年間は伸び伸びと遊びました(笑)。30年前は珍しかった海外旅行へ行ったり、国内の美術館巡りをしたり。そういう時間が取れたのは、今の舞台監督という仕事のベースになつているかもしれませ

ん。今も舞台のシーズンオフには毎年、海外へ出かけて劇場巡りなどをしてるんですよ。(談)



愛知淑徳大学文学部国文学科第1回卒業生 (昭和53年度卒業) 冬頭裕子さん

昭和32年生まれ。現在51歳。卒業後、昭和57年よりオペラの演出助手、59年よりバレエの舞台監督の仕事始める。現在は、年間平均20本の公演の舞台監督を務めている。平成14年に(財)名古屋市文化振興事業団・芸術創造賞を受賞。15年より本学文化創造学部の非常勤講師として、後期に舞台創造論を担当。11月には松岡伶子バレエ団「眠れる森の美女 全幕」の舞台監督を担当。



国文学科Bクラスの入学写真。当時の1号棟は3階までしかなかった



卒業時の長久手キャンパス。入学時に比べて山が切り開かれ、新校舎や図書館の工事が始まっている。道路やグラウンドも整備された



国際ホテルで開かれた謝恩会。下の写真の右から2人目が冬頭さん。司会を担当した

生の時、演劇好きだった素三郎先生の肩入れで名古屋市民会館(現在、東京大学文化市民会館の中ホール)を借り、淑徳大学主催で名古屋の大学の演劇部の合同発表会のようなものを開いたこともありました。私たちの学生時代は、女子大生は卒業しても就職先がない頃で、家事手伝い、結婚というパターンが普通でした。大学をやめて結婚した同級生も何人かいます。先生になった友達はいましたが、私の周囲で就職した人は一人もいませんでした。私は卒業後、親の会社の手伝いをしていましたが、趣味で続けた演劇のサークルで知り合ったプロの方に声をかけていただき、オペラの演出助手の仕事をする。その後、バレエの舞台監督を始め、多い時には年間30本以上の公演に関わってきました。舞台監督は公演当日の責任者、舞台全体の進行役です。舞台は、生なのでやり直しがきかない、それだけにやりがいがありますね。淑徳の4年間は伸び伸びと遊びました(笑)。30年前は珍しかった海外旅行へ行ったり、国内の美術館巡りをしたり。そういう時間が取れたのは、今の舞台監督という仕事のベースになつているかもしれませ